

## 2. 活動計画

Action Plan

---



## 2. 活動計画

### (1) 博物館の5つの活動

新名護博物館の活動は、施設の中で完結せず、名護・やんばる全域を視野に入れながら展開されます。この基軸となるのは、以下の5つの活動です。

#### ①資料収集・保存 ②調査・研究 ③展示 ④教育普及 ⑤連携

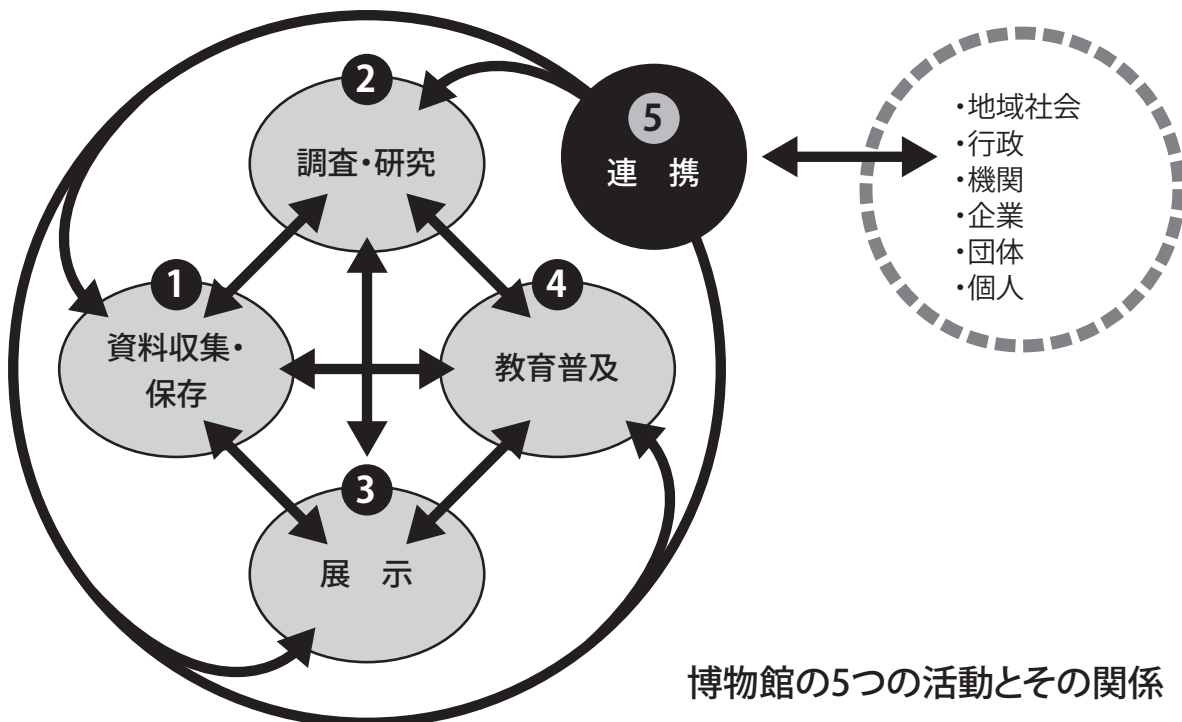
5つの活動は互いに密接な関係を持ち、どれか一つを単一的に議論することはできません。

資料収集・保存活動は、博物館の根幹をなす活動です。多くの場合は、この活動に基づいて調査・研究、展示、教育普及活動が展開されます。

調査・研究活動の成果は、展示、教育普及活動で活用され、さまざまな展示会、体験学習等の充実につながります。

また、多様な交流を図る連携活動を推進させることで、博物館活動がより充実し、利用者の利便性向上や博物館活動への理解向上につながります。

このように5つの活動を総合的にとらえた上で、各々の活動計画を述べていきます。



博物館の5つの活動とその関係

## 2. 活動計画 -資料収集・保存

---

### (2) 博物館活動の内容

#### ① 資料収集・保存

## 出かけ、集め、整理する

### 【活動方針】

やんばる全域を主体に計画的な収集をすすめ、フィールドにおける実践的活用を想定した保存をめざします。

### 収集の方向性

基本テーマである「名護・やんばるのくらしと自然」を理解する上で必要となる資料を中心に収集します。現地で保存可能なものは、なるべくそのまま残して活用することを検討します。

また、民俗資料のうち、収集が軽視されがちな現代資料や、写真や映像、音声などの資料も重要な収集対象に位置づけます。

### 十分な収蔵スペースの確保と計画的な資料収集

現博物館の収蔵庫は、収蔵しきれない資料が溢れるほどであり、今後の継続的な資料収集活動を見据えた適切な規模の収蔵スペースが必要になります。また、限られた収蔵スペースを有効的に使うためにも、目的と工程を明確にして、現在不足している分野の資料収集も補いつつ、バランスのとれた資料収集・保存計画を実行する必要があります。

### 資料の保存とその安全性

収蔵された資料は、その種類・特性に応じた適切な保存をおこなう必要があります。特に貴重な資料は特別な収蔵環境が必要になりますが、現在の名護博物館の収蔵庫では対応できていません。このような資料の収蔵が可能な環境を整備する必要があります。

また、資料保存は、温度、湿度、塩害、害虫などの対策に加え、火災や地震・津波、台風など、自然災害への安全対策も万全でなければなりません。

### 収蔵資料の活用

収蔵した資料を有効に活用するためには、資料にかかる負荷を最小限にしつつ、利用可能なシステムを構築する必要があります。また、収蔵情報を一般に公開し、市民や研究者が活用できる仕組みが不可欠です。

## 2. 活動計画-資料収集・保存

### 【展開事例】

活動方針を基にした具体的な活動の方向性は以下の通りです。

### 資料収集

#### ○ 自然史

地域性の高い資料や人の暮らしと関わりの深い資料を優先して収集します。  
絶滅が心配されている貴重種だけでなく、種の多様性をふまえた上での収集に努めます。  
学術研究の基礎となる標本（タイプ標本）なども積極的に収集します。  
在来家畜や農作物など、遺伝子(種内)の多様性を考慮した収集もおこないます。

#### ○ 歴史・民俗・考古

地域の歴史を理解する上で重要となる古文書や古地図、写真などの資料収集をおこないます。  
公文書については、貴重な歴史的文書を中心に収集します。  
名護・やんばるゆかりの人物に関する資料を継続的に収集します。  
くらしの変遷を理解する上で重要となる民俗（生活）資料を収集します。  
埋蔵文化財の保存は文化課を中心におこない、博物館収蔵物とは別枠で検討します。  
移民や戦争に関する資料も継続的に収集します。

#### ○ 現代資料(戦後生活資料)

くらしの変遷を捉えるための資料を積極的に収集します。  
時代背景がわかる資料を丁寧に収集します。

#### ○ 美術工芸

名護・やんばるに縁があり、美術活動に貢献した人物の作品を中心に収集します。  
名護・やんばるを題材とした作品の収集を心がけます。



ズアカアオバト（自然史資料）

## 2. 活動計画 -資料収集・保存

---

### 保存と活用

#### ○ 適切な収蔵機能の整備

特別収蔵室を配置し、空調調節が常時必要である貴重な資料の保存に対応

例：程順則資料（歴史）／琉球巖真景（美術工芸）など

資料の種類・保存方法に応じて、収蔵庫の中にそれぞれ適切な収蔵室を配置

例：液浸標本室（自然史）／冷凍室（自然史）／絵画収蔵室（美術工芸）など

非常時で電気が供給されない場合、自家発電等によって空調・冷凍機能などを確保

#### ○ 資料保存に必要な業務

資料受付台帳の記入、写真撮影、データ化

登録資料の整理、適切な収蔵室への配置

薬品処理など、資料保存のための適切な処置と資料劣化の有無の定期的確認

標本作製業務（保存用／展示用）

虫害を防ぐための定期的なくん蒸、資料搬入出の際の仮くん蒸

収蔵室の温湿度等の管理・記録

貸出の際に資料の安全性が確保されるルール作り

IPM（総合的病害虫管理）の導入

#### ○ 収蔵資料の利活用

資料に負荷をかけず搬入出をスムーズに行うためのシステム

例：動線設定／昇降装置／資料一時保管室／くん蒸室 など

収蔵資料の種別、写真、収納場所等の情報を整理し、データベース化して公開

（p. 32）

外部への資料貸出をおこなうとともに、資料が使われたことで得られた成果などを公開

貸出用キット（p. 30）の整備による資料貸出利用の促進

企画展や特別展示（p. 25）などでの利用

一部の資料を収蔵展示（p. 26）という形態で公開

## 2. 活動計画 - 調査・研究

### ② 調査・研究

## みんなで知る喜び

### 【活動方針】

やんばる全域を視野に入れた調査・研究をおこない、市民の理解を得て将来の暮らしに役立つように公開、実践します。

### 多くの人々が関わる調査・研究

博物館の学芸員のみがおこなう調査・研究だけでなく、さまざまな人々が関わることで「みんなで知る喜び」を創造、共有します。

### 対象とする分野

調査・研究対象となる分野は多種多様であり、そのアプローチの方法も実にさまざまです。

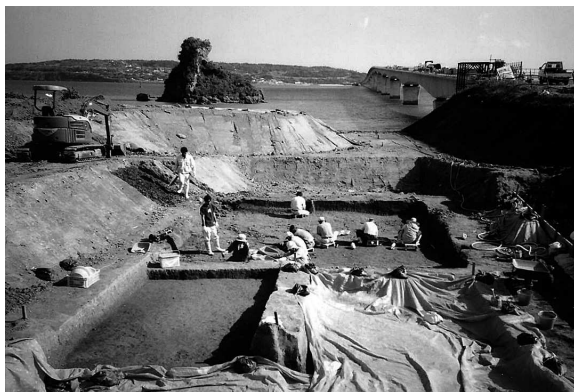
新名護博物館の基本テーマは「名護・やんばるの暮らしと自然」であり、このテーマを展開して活動するために6つの視点があります(p. 9)。

調査・研究活動はこれらの視点をそれぞれ掘り下げ、さまざまな角度からアプローチすることで、名護・やんばるに関する知見を蓄積し、市民のニーズに応えます。

また、単発的ではなく、中長期的な計画に基づいた活動を継続的におこないます。

### 成果の還元

活動で得られた成果は公開し、市民の生涯学習や研究、学校教育、地域産業などに貢献します。



埋蔵物の発掘現場



集落散策会(瀬嵩公民館)



## 2. 活動計画 -調査・研究

### 【展開事例】

6つのテーマ展開に沿った、調査・研究内容の代表例をあげます。

#### やんばる本来の自然生態系の再生

名護湾、大浦湾、羽地内海の特徴と自然生態系(それぞれの海に面する山まで含む)  
河川環境の復元とリュウキュウアユの復活

#### 在来文化資源を活かした、やんばる型農業の創造

在来資源の保全と活用(アーク、琉球犬、ハマホウレンソウなど)  
亜熱帯酸性土壌を活かした複合型農業(パイン、シークワサー、稲など)  
名護・やんばるの漁業誌(海の小字名、魚垣、捕鯨など)

#### 伝統行事の保存・継承とあらたな交流

村踊りの歴史・文化とその多様性  
名護・やんばるの祀り(祭り)

#### 集落の成り立ち、村(ムラ)の歩みの継承

フクギや公民館などにみられる集落の変遷  
名護・やんばるの教育史  
地域の言語と民話

#### くらしの知恵・わざ・心を、体感・実践する

アダンやクロツグを使ったおもちゃづくり  
在来食資源(家畜、ソテツ、ハマホウレンソウなど)の料理方法  
竹の植林と民具の製作

#### 先人たちが遺した文化遺産の保存・活用

名護・やんばるの人物史  
(程順則、蔡温、徳田球一、山入端隣次郎など)  
名護・やんばるの石碑  
戦争体験や戦争遺跡、戦後生活史  
過去の災害記録



ウンジャミ (大宜味村塩屋)



## 2. 活動計画 - 調査・研究

名護・やんばるで想定される調査・研究テーマ	
活動の方向性	想定される展開事例
<b>■やんばる本来の自然生態系の再生</b>	
名護・やんばるの地形・地質	天仁屋の褶曲、海岸地形、ピーチロック など
山(奥山・里山)の生態系	嘉津宇岳、安和岳、名護岳、リュウキュウイノシシ、カンヒザクラ、チョウの食草 など
川の生態系	河川生物の生活史、リュウキュウアユの蘇生、河川環境の復元 など
海の生態系	
名護湾(西海岸)系	ビトツヤザトウクジラの利用と資源管理 など
羽地内海系	屋我地島の干潟、羽地内海の貝類、底生生物など
大浦湾(東海岸)系	アオサンゴ群落、シュゴンと海草藻場、マングロープの生態系、自然海岸の現状調査 など
生物の移動	鯨類、ウミガメの回遊、サシバ・アカハラダカの渡り など
在来生物と外来生物	希少動植物、天然記念物、マングースなどの外来生物の駆除と活用 など
<b>■在来文化資源を活かした、やんばる型農業等の創造</b>	
在来文化資源	やんばるの山糶ぎ(炭焼き、藍づくり、薪) など
在来家畜	アーグ、琉球犬、シマビージャー、宮古馬、チャーン など
在来品種	ハマホウレンソウ(ツルナ) など
	名護の漁業(捕鯨)誌、捕鯨と人との関わり など
近世農村の生業のしくみ	稲作、サトウキビ、塩田 など
名護・やんばるの農業史	名護・やんばるの養蚕、パイナップル など
<b>■伝統行事の保存・継承とあらたな交流</b>	
王府の芸能とやんばる	村踊り(踊りの型、ルーツ、小道具とその製作方法)
名護・やんばるの祀り・祭り	民俗芸能(エイサー、ウスデーク) / ウンジャミ
<b>■集落の成り立ち、村(ムラ)の歩みの継承</b>	
やんばるの集落構造	名護市の集落環境マップ
	集落の井戸、石散當、拝所、フクギ囲いのある集落
	風水と名護(風水と集落の形成)
	風葬地
グスクと集落	名護・やんばるのグスク
	北山落武者伝説のムラ(ムラ立て伝説)
	久志観音堂と久志坂岡
近世琉球におけるやんばるの集落	集落移動
	御嶽と集落
やんばるの近代	廃藩置県と名護・やんばる
	山原船と港
	比嘉宇太郎と名護
	名護湾埋め立て前と後の変化
字ごとにたどる近現代史	名護・やんばるの字誌
	名護・やんばるの学校誌/学校の制服・校章
	集落とフクギ、公民館、市場の変遷
	慰霊の塔(戦災文化財)
開発と集落	羽地大川流域の山の暮らしと地名
	羽地朝秀の研究(羽地大川ダムとの関わり)
	金川銅山と羽地大川
名護・やんばるの言語・地名	言語、民話 など
<b>■ぐらしの知恵・わざ・心を、体感・実践する</b>	
名護・やんばるの匠の技	名護・やんばると大工
	名護・やんばるの鍛冶
	清村勉とコンクリート
やんばるの食文化	野草と食生活
	ソバ、ソーキ汁、ヤギ汁、ソテツ、ハマホウレンソウ(ツルナ)、みぞあえ など
こどものあそび	アダンやマーニ(クワツグ)の葉を使ったモノ、ことば遊び
<b>■先人たちが遺した文化資産の保存・活用</b>	
近世琉球の先人	程順則と名護、蔡温と名護 など
近代沖縄の先人	徳田球一と名護 など
戦争(名護・やんばるの沖縄戦)	戦争体験、戦争遺跡 など
記念碑	石碑、歌碑 など
名護・やんばるゆかりの芸術家	平良孝七、宮城與徳、古波蔵誠仁、山田真山、安次嶺金正、山入端一博 など
	名護・やんばるの美術教育

## 2. 活動計画-展示

### ③ 展示

## 出会いと発見

### 【活動方針】

博物館を訪れる人が、「名護・やんばるのくらしと自然」の関係を発見し、さらにやんばる各地のフィールドに足を運びたいくなるような案内機能を持った展示をめざします。

### 温かみのある展示空間

開放的で温かみがあり、手作り感があふれる現在の常設展示の雰囲気を継承し、さらに内容を充実させた展示空間をめざします。



### わかりやすい展示

長すぎず簡潔な説明文や直感的にイメージできる展示手法により、万人にわかりやすい表現を心掛けます。より深く展示を知りたい来館者のために、図録や音声ガイドなども整備します。また、県外や国外からの来館者にも配慮した内容とします。

### 地域性を前面に出した展示

展示説明に地域の言語や地方名を積極的に取り入れるなど、特色ある表現方法を検討します。ただし、これらの地域的背景がわからない来館者にも内容が理解できるような工夫は必須です。

### 体験できる展示

資料を見るだけでなく、実際に使って学べるような体験型の展示手法を積極的に導入します。展示ケースに収納する資料は最小限にし、可能な限り本物の資料（飼育している生体なども含む）を露出展示することで、触れることが可能な身近な展示空間をめざします。



### 変化に富む展示

基軸となる展示テーマは、「名護・やんばるのくらしと自然」という基本テーマを理解するための不変的なものであり、継続的に公開していく必要があります。しかし、同時に展示の固定化や、情報の劣化などの課題を抱えることにもなるだけに、適切な対応を誤ればリピーターを減少させることにもなります。基軸となるテーマの中で視点や切り口を変え、柔軟に展示替えができる体制・仕組みを検討します。また、季節感のある地域情報を発信し、市民が「自分たちの博物館」であると実感できるような展示空間づくりをめざします。

## 2. 活動計画-展示

### 【展開事例】

博物館の展示活動は以下のように整理することができます。

### 常設展示

ガイダンス機能が特に強く、「名護・やんばるのくらしと自然」を全体的に捉えて常に公開する展示です。建物の中で公開する屋内展示と、敷地内の野外を活用する屋外展示があります。

### 企画展示・特別展示

最新の調査・研究成果や活動内容を公開する展示です。博物館独自のものだけでなく、共催企画や巡回展など、さまざまな団体や市民と協力しておこないます。



### 市民が主催する展示(ギャラリー利用)

市民が主催者となり、博物館ギャラリーなどでおこなう展示です。スムーズな企画・運営ができるよう、博物館ではサポートします。



## 2. 活動計画 - 展示

### 収蔵展示

保存に影響がない範囲で、収蔵されている資料を公開する展示です。収蔵庫に収蔵されている資料を見学することは、非日常的な感覚を来場者に与えるとともに、資料保存の必要性やその方法を学習する機会にもなります。

### 移動博物館

常設展示の中からテーマを選び、館外で簡易的に展示するものです。博物館に足を運びづらい遠隔地や、市外に在住する利用者などにも対応します。

教育普及事業としておこなわれる学習キットや、出前講座 (p. 30) などとも併用します。

### バーチャルミュージアム

さまざまな博物館活動の情報、地域の情報を「バーチャルミュージアム (p.32)」として館内の端末で公開するとともに、インターネットで外部にも配信します。

「やんばる全体が屋根のない博物館」と定義するフィールドミュージアムの視点では、各地にある自然環境や文化財なども展示の一つであり、これらの情報もバーチャルミュージアムで積極的に配信していく必要があります。





## 2. 活動計画-教育普及

### ④ 教育普及

## みんなで遊び、みんなで学ぶ

### 【活動方針】

地域への誇りを育む学校教育への働きかけを強化します。

### 体験プログラムをさらに充実

名護博物館が25年以上継続してきた「ぶりでい子ども博物館」は、子どもたちが年間を通して野外でさまざまなことを学ぶ体験講座であり、全国的にも先駆けとなる取り組みでした。

新名護博物館では、対象となる参加者の年齢層や体験プログラムのメニューを拡充し、田畑や山、川、海などの自然と共生してきた名護・やんばるの生業を、再体験できるような魅力ある体験学習の実施をめざします。

### 「博学連携」の強化

平成23年度から段階的に適用されている文部科学省の新学習指導要領では、子どもたちの「生きる力」を育むという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視しています。

こうした背景のもと、博物館が学校教育で果たすべき役割は高まりつつあるといえるでしょう。

教育普及活動の対象となる名護博物館の利用者は、名護・やんばるの人たちや、中南部・県外から訪れる観光客などさまざまですが、特に学校教育との連携(博学連携)に重点を置き、子どもたちの「生きる力」と、地域への誇りや多様な個性を育むための教育に力を入れます。



小学校の授業での博物館利用



## 2. 活動計画 -教育普及

### 【展開事例】

#### 学校との交流

##### ○ 教員研修・相互交流の強化

学校教育課との連携を密にし、学校教員の定期的な博物館研修をおこなうなど、教員と博物館職員との交流の機会を設けます。博物館活動と学校教育の相互理解を図るとともに、教員からの助言などを教育普及活動に活かします。

##### ○ 就学前教育と博物館利用

幼稚園や保育園とのネットワークを強化し、企画展やイベント時に積極的に足を運んでもらえるようにします。

一般的に、就学前の幼児への教育は、人格形成の基礎を培う重要なものとされています。この時期に博物館に親しみ、地域の文化や自然を体感することは将来的な人材育成の観点からも重要です。

##### ○ 学校教育における博物館利用

学校教育の中でどのような博物館利用が可能かを提示し、社会科や理科、生活科、総合的な学習の時間(総合学習)などの授業で、博物館が積極的に活用される機会を増やします。

具体的には、学校の年間計画や各学年のカリキュラムを把握した上で、博物館資料や展示を授業に応用するための「博物館利用の手引き」など作成し、各学校に配布して活用を図ります。

同時に、後述の体験講座や出前講座、貸出学習キットなど、学校教育の需要に応えるプログラムのメニューを整備し、利用手引きの冊子や教員との相互交流の場などで紹介していきます。



学校の授業における博物館利用

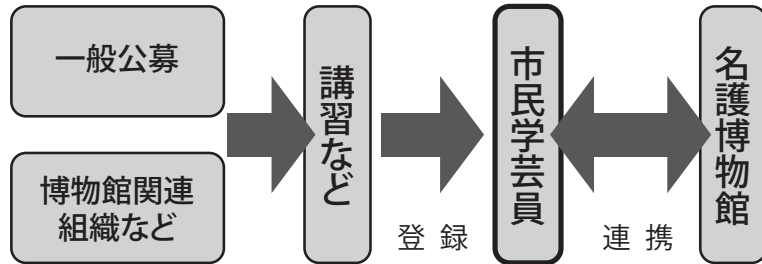
## 2. 活動計画-教育普及

### 生涯学習(学校教育を含む)の支援

#### ○ 市民学芸員などの認定

博物館活動をサポートするための講習などを受けて、一定の基準をクリアした方々を「市民学芸員」として認定します。

こうした取り組みは、博物館活動を充実させるだけでなく、市民学芸員自身の生涯学習促進の機会にもなります。



#### 体験講座

#### ○ ぶりでい子ども博物館

これまでのノウハウを活かし、さらに発展させた子ども博物館講座として展開します。対象年齢層の拡充や、子どもたちの考える力をより高めるような学習内容への改善を図ります。

#### ○ その他の体験講座

親子体験講座など、子ども博物館の対象年齢に当たらない参加者の講座も積極的におこないます。また、博物館ならではの体験メニューを参加者に提供します。

#### (体験学習の例)

塩づくり体験・・・昔ながらの塩田を使って  
トーフづくり体験・・・石臼を使って  
黒糖づくり体験・・・キビ刈りから砂糖車を使った黒糖づくりまで  
骨格標本づくり体験・・・ネズミからクジラまで色々な動物  
漆喰シーサーづくり体験・・・赤瓦と漆喰で  
パーキ(ざる)づくり体験・・・竹取りから編むところまで  
地域めぐり体験  
琉球王府時代の測量体験・・・印部(しるべ)石を使って  
自然エネルギー体験・・・水車を用いた小水力発電など





## 2. 活動計画 -教育普及

### 講演会・学習会など

名護・やんばるのくらしと自然に関する、さまざまなテーマの講演会や学習会を定期的におこない、博物館利用者の生涯学習を支援します。

### 貸出学習キット

さまざまな体験ができるコンパクトな学習キットを作り、学校や地域などに貸し出します。学習キットには、利用手引きを備え付け、利用者の学習を手助けする工夫を図ります。

### 出前講座

学校や地域などに出かけておこなう講座です。これまでは、学校などから要請されて学芸員が足を運ぶケースが多かったのですが、新名護博物館では、学校などとの連携を活かし、積極的に博物館側から足を運びます。

出前講座の講師は、専門的知識をもつ学芸員のほかに、市民学芸員やボランティアなども考えられます。

また、前述の貸出学習キットを活用したり、バーチャルミュージアム (p.26、p.32)を応用した会話型通信講座なども想定されます。

### その他のクラブ活動など

学校の児童・生徒や市民の生涯学習を推進するクラブ活動やサークル・同好会に、博物館設備や技術の提供など、必要な協力、支援をおこないます。



サーター車でサトウキビをしぼる  
(博物館中庭)



イネモミを選り分ける子どもたち  
(博物館中庭)



子どもたちから職員へのプレゼント

## 2. 活動計画-連携

### ⑤ 連携

## 「ぶりでい」の理念を表現する連携

### 【活動方針】

#### フィールドミュージアムと新名護博物館

名護・やんばる全体を「屋根のない博物館」と捉えるフィールドミュージアムをめざす新名護博物館では、フィールドにおける役割を明確にした上で、さまざまな連携を図る必要があります。基本構想では下記の3つの役割をあげました。

- 名護・やんばる地域の総合ガイダンス拠点
- 名護市域各地区の活動拠点
- 新たなまちづくりの原形となる交流、にぎわい拠点

#### さまざまな連携の強化～共働することによって共に向上する～

みんなで創り上げる「ぶりでい(みんなの手)」の理念と方法を掲げてきた名護博物館にとって、連携は博物館活動をさらに充実させる重要な条件のひとつです。市民や諸機関の協力を得ることで、単独では困難な活動も実現可能になるからです。

また、フィールドミュージアム構想を実現させるためには、名護・やんばる各地で活動する組織や個人との連携が欠かせません。このような連携を強化することによって、名護・やんばるの情報を集約するとともに、他の4つの博物館活動(①資料収集・保存、②調査・研究、③展示、④教育普及)をさらに充実させ、利用者の利便性の向上を図ります。

#### 連携の成果を地域へ

地域との連携は特に重要で、住民(市民)に理解され、受け入れられなければ博物館活動は存続できません。さまざまな連携によって得られた博物館活動の成果は、教育普及活動などを通して地域に還元し、博物館活動についての理解をさらに深めてもらいたいと考えます。

名護博物館のこれまでの調査・研究、教育普及、展示活動が、沖縄在来豚「アーク」の保存や、昔ながらの塩田による製塩法の復活、津嘉山酒造所の文化財登録など、地域のブランドを創出するきっかけとなった事例もあります。博物館活動が充実することによって、地域産業やまちづくりにも貢献できるのです。

新名護博物館は、地域に根ざし、共に成長していける博物館をめざします。



アークの肉を使った料理  
(名護市内)

## 2. 活動計画-連携

### 【展開事例】

連携活動は、他の4つの活動と密接な関係にあります。以下に代表的な連携活動の例をあげます。

#### 広域データベース(バーチャルミュージアム)の構築、情報の共有化

さまざまな団体と連携し、技術提供などの協力も受けながら、名護・やんばるの情報が集約されるデータベースを構築します。インターネットや館内・連携団体の端末によって、これらの情報を閲覧可能にするシステムの導入を検討します。

また、集約された情報は、博物館無料スペースにおける情報コーナーの展示などにも活かされます。このデータベース、もしくはその一部を「バーチャルミュージアム(仮想博物館)」とよびます。

#### (発信が想定される情報)

新名護博物館活動に関する情報(収蔵資料や展示、イベントなど)

連携団体の情報(展示やイベントなど)

名護・やんばるでおこなわれるイベント情報や地域行事、字情報のカレンダー  
季節の自然情報(花の開花、渡り鳥、クジラの回遊、ウミガメの産卵など)

名護・やんばる各地の文化財や自然などに関するマップや情報

名護・やんばるでおこなわれた研究成果の情報、「やんばる学」に関する情報

研究者や各種講座の講師、文化財・まちなか案内人情報などを検索できる人材バンク

一般市民などから投稿された名護・やんばるに関する情報

#### 共同調査・研究

必要に応じて、市内外のさまざまな機関や組織、個人と共同で調査・研究をおこないます。

また、市民学芸員の活用や、一般市民が調査に参加するなど、多くの人が関わる機会をつくりま  
す。(研究テーマについては p.23)

#### イベントなどの共同企画

さまざまな組織や個人と連携を図ることで、より充実したイベントなどの開催を図ります。

#### (想定される事例)

企業や研究機関などと連携した企画展、展示における技術提供やブース出展など

連携機関における企画展などの巡回展

学校や社会教育施設、研究機関や公民館などと共催する講座・講演会

## 2. 活動計画 -連携

### 産業連携

地域産業と連携し、地産地消を基本にしたさまざまな活動を展開します。

また、体験型観光や(※)着地型観光に応用できる地域の潜在資源を掘り起こし、観光産業や地域産業などと連携して博物館や地域への誘客をはかります。

※ 観光客や旅行者を受け入れる地域が、自分たちの持つ観光資源を活かして企画するツアー

### (想定される事例)

地域性を活かしたグッズの開発と、ミュージアムショップでの販売

地元農家や NPO などの団体と連携し、博物館敷地内で在来資源などを飼育・栽培

⇒ 加工 ⇒ ショップ販売など、小規模な 6 次産業の展開

観光協会や旅行会社、宿泊産業などとの連携

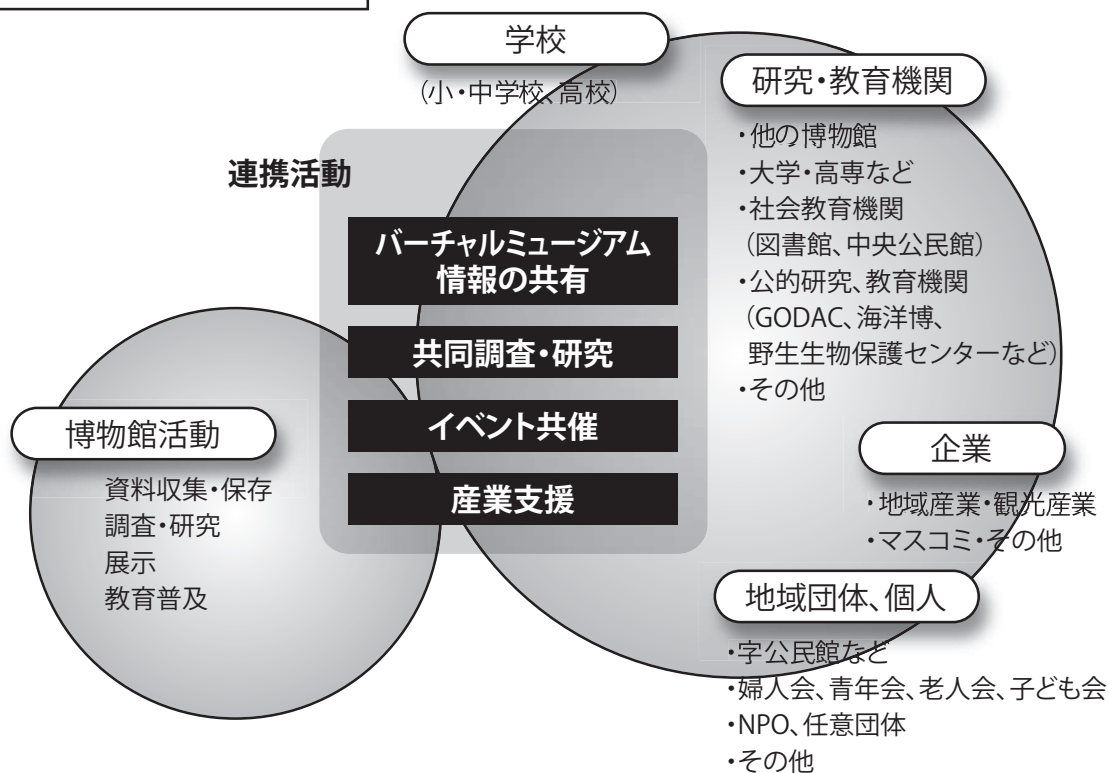
⇒ 博物館見学や体験学習を旅行プランに組み入れるなど

地元マスコミとの連携によるイベントなどの効果的な広報

### その他博物館活動のサポート

NPO、ボランティアなどによる管理運営委託、博物館活動のサポート( p. 85)

### 連携活動のイメージ図



## 2. 活動計画

### (3) 博物館活動を推進させるために

新名護博物館ではソフト面・ハード面共に充実させ、行政だけでなく市民も含めた人・モノ・情報が交流する仕組みづくりが必要になります。しかし、現在の名護博物館の運営体制や施設で、博物館活動をさらに充実させることは非常に困難です。その対策として以下のような取り組みを進めます。

#### 情報集約・発信の強化と博物館活動への理解向上

行政内部の各部署やさまざまな団体・個人と連携・協力し、共同事業を積極的に実施することで、博物館活動に対する理解を深めてもらうとともに、行政内外を越えた横断的な情報が博物館に集約される体制を築きます。その結果として、博物館活動が円滑におこなえるような体制づくりをめざします。

バーチャルミュージアムについては、簡単に扱えるよう利用者の利便性を図ります。また、公開する情報の二次使用についてはなるべく自由度を高くし、幅広い分野で利活用されるような仕組みづくりをめざします。

- 行政・市民で不要となり廃棄される資料情報が、博物館に集約される仕組み
- 人材データベースの活用による情報交換、やんばるの各機関、施設間の交流による人材の補完
- 調査・研究や展示、教育普及活動に企画段階から市民が参画する仕組み
- バーチャルミュージアムなどの利活用で、県内外を問わず新博物館の活動をPRする仕組み

#### 博物館活動をおこなう人員・体制の強化

##### ○ 博物館職員の充実

必要な専門知識を持つ学芸員を適切に配置し、さまざまな資料に対応した収集・保存や調査・研究がおこなえる体制づくりをめざします。収蔵資料の整理・データベース化は、半永久的な作業であるため、必要な人員を配置するとともに、マニュアルなどを作成し、人員交替がおこなわれても一定の質を保てるよう努めます。

教育普及活動では、「博学連携」を強化するためにも、学校との密な連携を図る専門職員の存在が不可欠です。また、多様な博物館活動をサポートする市民団体や、その他の組織に対応できる専門職員も必要となります。

##### ○ 外部団体による活動のサポート

博物館活動をサポートする「市民学芸員 (p29)」やボランティアなどの育成を積極的に推進します。こうした人々は、博物館利用者であると同時に、他の来館者にサービスを提供する立場でもあるため、対応する博物館職員と綿密な情報交換をおこない、活動の方向を共有する仕組みが必要です。



## 2. 活動計画

### 活動の拠点となる施設と設備の確保

現博物館の大きな課題として、活動スペースが不足している点があげられ、管理者だけでなく、利用者も大変な負担を強いられています。

駐車場は圧倒的に不足しており、イベント時には周辺の小学校や駐車場を一時的に借用して対応するしかありません。修学旅行などで来館する大型バスの駐車スペースが確保できないことも課題となっています。

また、市民講座やさまざまな体験学習をおこなう場所、サポーターとなる博物館友の会や団体などの利用スペース、会議室や調査・研究作業スペースなど、博物館活動を推進させる上で不可欠な空間が不足している事態は、急を要する深刻な問題だといえます。

新名護博物館では、このような活動場所の狭小性を解決し、活動を推進させるための十分な面積と必要な諸室、設備などが確保されることが重要です。

### 限られたスペースでの活動



ギャラリーでの拓本裏打ち作業



新しく収集した資料



紙芝居実演会(博物館1階ロビー)



資料であふれる所蔵状況



休憩所でムーチャー(餅)づくり

